魔女の憂鬱

まじょのゆううつ

夜士郎

表紙イラスト：トイト

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔女の憂鬱』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

まじょの
ゆううつ
魔女の憂鬱
夜士郎
表紙／トイト
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ノキア

外見は愛くるしい美少年。その正体は生成された使い魔。ある程度の常識以外はほとんど白紙の状態で、創造主には子犬のように付き従う。

ティーナ

まだ幼さの残る少女。年若くして実力派の魔法使い。プライドが高い。しかし、性的な事柄にはめっぽう弱く、男の裸を見ただけで顔を赤くしてしまう。

イリス

ティーナと仲の良い、女淫魔。エッチな身体をしたエッチなお姉さん。エッチなことなら何でも来い！　なオールラウンダー。

「ん……、そんなに見るな、ばか……」

目の前で、拗ねたような顔の少女が、上目遣いに睨んでくる。その瞳の中に映るのは、耳を垂らした子犬のような、あどけない少年の姿。ご主人様の言いつけに、彼は、必死で目を逸らそうとするのだが。――けれどもそれは。

（うわぁ……、奇麗だ……）

無理な相談だった。

ベッドの端に腰かける、華奢な肢体。絡みつく艶やかな紫の髪が、シーツの海の上でたゆたう。その色の濃い髪とは対照的に、透き通るほどに白い肌は目映ゆいばかりだった。

思わず、息を呑む。

小さな顔に填めこまれた、琥珀色の瞳。その眦と、見目の良い小鼻はつんと跳ね上がり、内に秘めた気の強さを感じさせる。柔らかに咲く薄桃色の唇は、今はきゅっと引き締められて、小さく震えていた。

頬が、赤く染まっている。

あどけなさを残す顎のラインが、ほっそりとした首元へと落ちる。真っ白な肌のキャンバスに描かれる、細い鎖骨が、壊れてしまいそうな儚げな身体を柔らかく印象づける。

（なんて言ったら良いんだろう……。作られたばかりの僕じゃ、わからないよ……）

ノキアはただ、陶然とするほかない。

目が少女から離せない。

――その美裸身から、離す事なんてできなかった。

腰回りに、豪奢な布地が落ちている。重なりあうフリルの羽に銀糸を縫い込んだ、夜の闇に溶け落ちてしまいそうな漆黒のドレス。今はするりと、ドレスも、上質な薄絹で織られたキャミソールまでも脱ぎ落とし、裸の上半身を晒したまま、ベッドの上にぺたんと座り込んだその情景は、一枚の絵画のようですらあった。

か細い身体はいまだ成長期も終わらぬ子供のようだ。脂肪もほとんどない、薄っぺらなお腹の上にうっすらと浮き出す肋骨が、呼吸に合わせて開閉する様すら見て取れる。

小さな膨らみが、ゆるゆると上下していた。

陶磁器のような素肌に、ほんのわずかばかりの乳房。可憐なその胸は、手の平で覆えば全て隠れてしまうだろう。わずかばかりの脂肪をようやく掻き集めたようなその幼いバストはつんと上を向く小さな錐体だった。

頂点には桜の蕾が咲いている。それもまだまだ小さな、虫刺されにも似た、ほんのりと赤い可愛らしい乳首だった。

「――でっ！　ど、どうなのよ……」

ぷい、と顔を背けて、ご主人様が尋ねる。彼女――ティーナへと、ノキアは、

「その……、奇麗、だと思います。とってもとっても、奇麗で……、可愛い、です」

そう言った途端。少女の顔面がぼっ！　と真っ赤に染まった。

「ななな、何を言ってるのよ！　わ、私が聞きたいのはそういう事じゃなくて、えっと、その……」

顔を背けたまま、もごもごと言い淀むティーナ。その時、部屋の中にぱちぱちと手を叩く音が響いた。

「あはははっ。いいわねぇ。あんたのそんな顔、初めて見たわ」

「うるさいうるさいうるさいっ、イリス、あんたは黙ってなさいよっ」

ティーナの顔が、嫌そうに歪んで、ベッドの端に向けられた。そこに、大人の美貌に稚気を混ぜ、にやにやと笑いながらこちらを見ている女が一人、豪快にあぐらを組んでいるのだ。

やたらと露出度の高い姿であった。もはや衣服とも呼べない、赤い紐状の布切れに身を包んだ扇情的な姿である。ティーナとは対照的に豊かなバストが、これでもかと前方に突き出している。秘部を隠す申し訳程度の布地を、引き裂いてしまわないのが不思議なほどに重く張りつめた桃乳が、彼女が身体を揺らすたびにゆさっと震えるのだ。

ベッドに埋まったヒップもまた、柔らかな脂肪を蓄え、艶めかしく照り輝いている。Tバック状の布は尻房の間に潜り込み、肉感的な尻たぶを隠しはしない。指で押せばどこまでも沈み込んでいきそうな、男の性をどこまでも欲情させずにはおれない脂肪玉であった。

首筋で切り揃えた黒髪。その髪のかかる切れ長の赤い瞳がひどく目を引く。見つめれば吸い込まれてしまいそうなそれは、人を惑わす蠱惑の魔眼。背中には大きく漆黒の翼が張り出した、人外の異様であった。

（この人が、ご主人様の友人の……）

淫心に人を蕩かせ、淫獄に落とすという、サキュバス――淫魔、イリス。彼女は黒髪をかき上げ、

「いーい？　使い魔の……、ノキア君だっけ。ティーナはね、こう聞きたいのよ。私を見て、エッチな気分になった？　って」

胸の前で手を組み、声を真似て、しなまで作ってみせる。だがそう言われても、ノキアは戸惑うばかりだ。

「あ……う、その……」

目の前には、ご主人様の顔がある。拗ねたような表情の中に、不安気にこちらを窺う様子が見える。

正直に、身体の反応を話した。

「なんだか、胸がどきどきして、お腹の奥が熱くって、もやもやしてます。……これが、えっちな感情なのでしょうか？」

ティーナの白く滑らかな肌が、頭の中をいっぱいに埋め尽くして、心臓はうるさいぐら

いに高鳴っていた。その細い肩と、わずかな乳房を目にするだけで、全身がかぁっと熱くなってしまうのだ。

淫魔はそのノキアの反応に笑う。

「んふふ。良い感じじゃない」

ねぇ？　と、ティーナへと顎をしゃくる。ノキアの感想を受けた当人は、湯気を吹きそうなほど顔を真っ赤にして俯くばかりであった。全身がほんのり上気して、白い美肌に朱が溶け込む。不意に少女の柔らかな、花の香気にも似た体臭が鼻孔へと吸い込まれる。

どきどきする。くらくらする。

（うう……。な、なんだか変だ、僕……。ど、どこかに異常が出たのかなぁ……）

体中を、熱い何かが暴れ回っていた。脈打つ鼓動に追いたてられ、駆け巡る体液が下腹部に集中していく。手の平がじわりと汗ばんでいく。

そんなノキアへと、

「そ、それじゃあっ！　この私が色々と教えてあげるんだから、こ、こっちに来なさいよっ！　はやくっ！」

そう叫ぶ甲高い声もどこか上擦っていて。くくく、とイリスが笑いを噛み殺す。

まるで足に石化の魔法をかけられたみたいだ。ぎくしゃくと、軋む足でどうにか歩み寄ったノキアに、少女はおずおずと手を伸ばした。少年の下半身を包むズボンに手をかけ

ぶちり。
「――っ！　あっ……」
びちり。ぬじりゅじゅるっ！
「あっ……、あ、くあああああっ！」
亀頭の先端が「それ」を引き裂くのをノキアは感じた。肉膜に押さえ込まれていた男根は、勢いついたそのままに、根元までも埋没してしまった。
（あ…、く、テ、ティーナ様…）
凄まじい圧迫感に苛まれる。
幼孔のあまりのきつさに、ペニスが押し潰されそうだ。苦悶に喘ぐ内臓が、男根を搾り取るようにうねる。脳髄を揺さぶる性感に目を回しかけて、ノキアはそれを見た。
こじ開かれた肉裂が、わずかに赤く濡れていたのだ。
「テ……、ティーナ様……」
にちゃ、じゅ、にちゅる……。
熱い接合部が濡れた音を弾く。少女は苦しげな息を継ぎながら、
「は……あ、はあ……。すごい、こんなところまで届いちゃってるよ、ノキアの」
おへその下に手の平を当て、何かを確かめるように言う。痛いはずだった。だが、その顔に気丈な笑みを浮かべたまま、彼女はそれでもご主人様として振舞うのだ。

えっちシーン試し読み ここからスタート！

そんな彼女が、むしろ、愛おしくて仕方がなかった。
「――ティーナ様の中、きつくって、熱くって、とっても、気持ちいいです……」
頭がぽうっとしてくる。主人の内臓を刺し貫いておきながら、浅ましいペニスはなお膨張してしまう。ぬるぬるで、きつきつな、少女の狭苦しい膣官をもっともっと味わいたい。そんな欲望が鎌首をもたげてきた。
（ああ、ぼく、ぼく……）
ぬじり、ぬじりと。
腰が動き出す。少女の体重に押さえつけられたままで、それでも身じろぎするように、ティーナの身体を揺り動かす。
「あ、あ、ちょっと、わたしまだ……」
開通したばかりの矮路では、わずかな動きも辛い刺激なのだろう。眉尻を下げ、身を竦めて、
「まだ、つらいの、だからっ……あ、ああっ！　そ、そんなに、んんん、動かさないでっ、あ、んくううっ！」
いやいやと、紫髪を波打たせ、必死に首を振るティーナ。
ぬちゅ！　ぬ！　じゅる！　じゅっ！
少女の狭隘な膣道は少しでも苦悶を和らげようと、潤沢な蜜を溢れさせる。埋まりきっ

た肉棒の、根元も見えぬ結合部で、愛液が小さな溜まりを作っていた。
不意にその光景に帳が落ちた。スカートを支える余裕すらなくした少女は、ただ煩悶に苛まれるのみだ。ノキアは両腕を伸ばし、瀟洒なドレスを乱雑に後方へと押しやった。
「ひゃあっ、ああっ！　んっ、あふっ、ああっ！　だ……め、うにゃあっ！」
肉道の中が燃え上がっていく。少女の臓腑が、熱く滾る。こねくられた膣官は柔らかく順応して、少年のペニスをうねうねと包み込んでくる。強烈な締めつけはそのままに、甘美極まる触感に、ノキアは少女のように喘いでしまう。
「ふああっ、はああっ！　うっ、く、はあっ！　ティーナ様、ああっ」
陰嚢がきゅうっと引き締まって、ペニスの付け根がびくびくと引きつれる。湧き上がってくるのは、一度体験したあの射精感だ。
「もう……私も混ぜてよ」
不意に、顔の前にゆさっと、巨大なヒップが覆い被さってきた。剥き出しの肉玉を突き出して、ティーナと向かい合わせに跨がるイリスのその顔はだらしなくも猫のように発情しきっていた。
「二人だけで楽しんじゃってさ。もう、もうっ」
ふて腐れたように言うや、イリスは、ティーナの乳首にカリっ、と噛みついたのだ。
「〜〜〜っ！　あ、ひやあっ！」

顎をはね上げ、幼躯が弓なりに引き絞られる。その瞬間、ティーナの内部がぎゅうっと、強烈に締めつけてきた。

（く……、う、ああっ！）

思わず弾けてしまいそうなその刺激から逃れようと、ノキアの手が宙を掻く。その指に何かが触れて、夢中で掴んだ。たっぷりとした肉感に富んだ、大きなお尻。指の隙間からにゅうと肉がはみ出してもまだ掴みきれないその肉玉を、容赦なく絞り上げてしまう。

「ひあっ⁉　あっ、んあああああっ！　そんな、乱暴にだなんて……ん、ふうっ」

熟れたヒップを揺らして、悦びの嬌声を放つイリス。肉メロンの挟間で、茶色の窄まりが、ひくひくと震えていた。

赤茶けた肉の色が濃い、生々しい肉の穴だ。細かな皺の寄ったそこは、彼自身の精液でてらてらと濡れ輝いていた。まるで呼吸をするかのように、ひくつく肉門の穴を陶然と見つめて。ノキアは我知らず、人差し指をつぷっ！　と挿していた。

「ちょ、そこはっ、ああああっ！　おひりの穴なんて、まだ早い……　ん、ひあああっ」

途端に淫魔の身体が、力なく崩れ落ちる。目前の少女の肩にへなへなとしだれかかるイリスへと、

「は、あは、あ……、なるほど、あんた……、そこが弱点なのね……」

にんまりと、邪悪な笑みを浮かべたティーナが、ノキアに言う。

「おもいっきりやっちゃいなさい」
「――はい」
主人に促され、ノキアは二本指を固めると再度菊門に挿入していく。ぐうっと括約筋が抵抗するが、精子の潤滑液で濡れた指はやすやすとめりこんでしまう。
「あ、あー、う、ああぐう～、らめ、ええ、お尻は、はああ～」
イリスの顔が、砂糖菓子が溶けるように甘く崩れていく。眉は力なく垂れ下がり、鼻の下は伸びきって、口から舌を吐き出して。
「うわ……、指が折れそうだ……」
収縮を繰り返すケツ穴の入り口は、骨を軋ませるほどに締めつけてくる。だがその内部はといえば、ペニスに伝わる膣の感触とも違う、触れてみればつるつるとした気持ちの良いものだった。
（うわ……、やっぱり熱い……。女の子の中って、どこも熱いんだな）
ゴムのような弾力の内壁に触れながら、ノキアは思う。
「あひっ、な、中触らないでっ！　ゆ、指が、中でっ……」
本当に弱いのだろう。内壁を指先で擦られただけで、過敏な反応を見せてくる。
「ん、あはっ。あんたのそんな姿も初めて見るわよ。ほらほら、もっともっと」
愉快気に催促してくるティーナに応え、ぬぷぬぷと指を出し入れする。じゅ、じゅ！

と粘ついた音を立てて内部をこねくり回してみれば、
「あひひゃああんっ！　おひり、おひりだめえぇえええっ！　んきゃ、きゃあんっ」
我を失ったように、イリスの肉体がのたうちまわる。大きなお尻が目の前で激しく揺れ動き、ばさばさと羽を打つ滑らかな背中には滝のような汗が流れた。舌を突き上げ涎を垂らし、官能に悶える淫魔には、泰然とした態度の欠片もない。
そして何より、潤みきった湿地帯から放たれる、凄まじい雌の臭気に、脳髄が白熱していく。淫魔の体臭には酒気でも含んでいるのだろうか、ノキアもまたイリスのように、快楽を追わずにはいられなくなる。
腰のあたりにもどかしくもわだかまるリビドーを、本能の赴くままに叩きつけた。飛び跳ねる幼い少女から放たれた声に、陶酔の色が濃く混じっていた。
「ひあぁっ！　ふあぁあんっ！　そ、そんな急に、奥までえっ」
こつんと、肉槍の先端が何かを叩いた。多分ここが、本当の最奥だ。ノキアはそれすら破ろうと、必死で腰を打ちつける。
ずじゅん！　ぐじゅるん！　じゅぷん！
獣欲のままに責め立てられて、ティーナは狂ったように泣き叫ぶ。
「ふあぁっ！　あひっ！　嘘、こんなおく、奥うっ、叩いてる、叩かれてるうっ！　激しい、ひゃあ、んああ、あああん、わたし、こんな、エッチに、ひあぁあああっ」

匂い立つ魔女のドレスを翻し、官能に打ち震える少女の身体が、汗に濡れて艶めかしく輝く。すでに幼い蜜壺はノキアのものに順応し、発情した肉体はその快楽を余す事なく享受していた。細腰が淫らな動きを見せる。涙をいっぱいに溜めた目尻はとろとろに溶け落ちて、甲高い喘ぎ声が部屋中に響いていた。

（ふああ、ああっ、凄い、すごいよ二人ともっ！　こんな、これが、エッチなんだ……、うあ、あああっ！）

射精感が高まっていく。お尻にぎゅうっと力を込めてそれに耐えながら、ノキアは、イリスの肛門から指を引き抜くと――、指を三本揃えて、力ずくでねじこんだ。

「ひぐっ⁉　あ、ひぃいいっ！　無理矢理、そんな、あ、あひあああっ！」

灼けるような腸管の中でぐうっと指を押し開く。尻の割れ目もこじ開き、肛門の中がラッパのように広がって、イリスはぶるぶると総身を打ち震わせた。ぎちり、と背骨が軋む。髪の毛が逆立つ。そして。

襲いかかる肛門アクメに、涎を四方へ飛び散らし、淫魔が絶頂へと駆けのぼる――。

「あ、は……あ――イっ……く、うううううううあああぁぁあああっ！　おひりの、おひりの穴でぇっ！　この私が……、んくっ、ひゃあああああんんっ！」

そのイリスの絶頂に感応し、

「くうっ、出る、出るっ！」

ノキアもまた、限界を迎えていた。
頭のてっぺんからつま先まで駆け抜ける衝撃。股間で爆発する絶頂――！
どびゅる！　びゅるびゅるううう！　びゅく！　びゅくううっ！　どぷどぷどぷっ！
恥骨をぐうっと突き上げて、ティーナの奥底まで注ぎ込むように、その中を全部埋め尽くすように、胎内でその爆発を解き放ったのだ。秘宮の洞に噴出する灼熱の溶岩に、少女の身体が身悶えた。紫の髪が打ち震える。
「うあ、あ、な、か、に、こんな、いっぱい……～～、んんあ、ひいああ、なにかくる、なにか、私、いく、いく、いくぅううあああああぁああっっっ!!」
びゅるるる！　どびゅるっるう！
射精は止まらない。凄まじい量のザーメンが、子宮の中を埋め尽くしていく。小さすぎる子袋には収まりきれぬ白濁が、みっしりと詰まった肉管を風船のように膨らませながら逆流し、びゅーびゅーと結合部から噴出していく。
「ふああ、はああっ！　お腹の中、いっぱい、いっぱいなのっ！　こんなに熱いのいっぱいで……、んあ、ああふあああ～」
がくがくがくっ！　と三人ともが身を捩り、痙攣し。そのまま、糸の切れた操り人形のように、ベッドの上に倒れ伏した。闇色のドレスは肉の狭間でもみくちゃにされ、汗と白濁と腸液と涎と、そんなあらゆる体液にまみれ、ただの雑巾と成り果てていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/